

## 岩波文庫「恐るべき子供たち」を読むための手引き

または、「古典の権威」は泣いていないか

松村 茂治

### はじめに

岩波文庫といえば、百花繚乱ともいうべき文庫全盛時代にあつて、一流の執筆者・翻訳家の手になる選りすぐりの古典叢書として、自他共に認めてきたのではなかったか。少なくとも私は学生時代以来そのように受け止め、岩波文庫が読めることに、一種の誇りのようなものを感じて接してきた。議論の途中で典故や根拠を聞かれたとき、「岩波文庫に、こう出ている」と言えば、それだけで相手を黙らせることができるくらいの説得力、信頼感があつたと思つている。

しかしながら、最近になって読み返した当該文庫の翻訳

物の中に、まさに「我が眼を疑う」とはこういうことなのかとも言うべき文章に、それも一ヶ所や二ヶ所ではなく、少し大げさに言えば、頁を繰る毎に遭遇したのである。

岩波文庫とはいえ、人の手になるものであり、見落としや思い違いがあつても不思議ではないのかもしれないが、翻訳家個人の仕事というわけではなく、大勢の人の手を経て発行されてきた書籍であることを考えると、この膨大な量の不自然な文章が、かくも長きにわたつて世に出回つてきたことは不思議なことである。

先に、「説得力、信頼感」と述べたが、換言すれば、誰もが「岩波だから・・・」と安心して読んでいたのである。

読んでいて、よく分からないところに遭遇すれば、ほとんどの人が、まずは自分の理解力不足を疑つてきたはずだ。その分かりにくさの原因が読者の側ではなく、出版社の側にあつたとすれば、これは罪なことではないか。しかも、岩波文庫を、単なる時間つぶしとしてではなく、信頼できる教材として利用している者もいるのである。

筆者は、本誌第三十五号のエッセーの一篇として、岩波文庫版「恐るべき子供たち」の訳文の不自然さについて取り上げたが、時間の制約もあり、当該作品全体について検討することができなかった。改めて、作品全体に眼を通して、当該文庫の、どこが何故おかしいのか、筆者なりの観点から整理して提示する。

### 本稿執筆までの経緯

本稿は、本誌前号に続く（一部重複する）執筆であるので、また、本稿の構成について理解していただくために、やや長くなるが、本稿執筆までの経緯について記しておく。学生時代に、いわゆる第二外国語として取り組んだフランス語ではあつたが、学校を出てからはほとんど触れることはなく、また、その間にフランスに行ったこともなかった。退職を機に一念発起してフランス語の学び直しを始め、それも二年ほど過ぎたところで、読むことの楽しさも少し

分かりかけてきたので、昔、文庫本で読んだことのある「恐るべき子供たち」を、原文で読んでみようと思つたのである。

そもそのもきつかけは、「フランス語で読む『恐るべき子どもたち』」（白水社・塩谷祐人編著）という解説つきの対訳本が出ていたことを知ったことによる。しかし、この対訳本は抄訳であるため、次の抄に橋渡しをする「つなぎ」の解説文はあるものの、ストーリーが中断されてしまふことは否めない。できれば物語の流れを理解した上で抄訳に取り組みたいと考え、手元にあつた岩波版を併せ読みながら、原文とその対訳を読むことにしたのである。

そのようにして読み始めて間もなく、対訳本と岩波版との間に数々の齟齬・・・というよりも、岩波版に、滑稽とも思える訳や、日本語として、あるいは小説の展開として不自然と思える箇所が目につき始め、筆者の理解が拙いのか岩波版がおかしいのか、確かめる必要が出てきたのである。もちろん、直接原文にも当たり、フランス語と岩波版との間のズレの有無についても考えたが、当方、フランス語はまだ修行中の身であり、全ての訳文の正誤を自信をもって判断することはできない。

そこで、セカンドオピニオンを求める意味で、もう一つ別訳を手に入れようと探してみると、十年程前に、古典新

訳文庫（光文社）の一冊として「恐るべき子供たち」（中条省平・中条志穂訳）が出版されていることが分かった。そこで、これを買いたい求め、三種類の翻訳に原文を加えた四冊を開いて読み進めるといふ作業を始めたのである。

その古典新訳文庫の「訳者あとがき」に、新訳を試みることになった経緯について、訳者の一人である中条省平氏が大変気になるエピソードを紹介している。

ある出版記念パーティーで出会ったコクトー・ファンの版画家から、「『恐るべき子供たち』の翻訳って、どれも分かりにくいよね。そう思わない？（中略）中条さん、新しく訳してくれないかなあ？」と問いかけられた中条氏は、後に、手元にあった二種類の文庫本を開き、「たしかに、よく読むと分かりにくいところが多かったのである。それで、これなら『恐るべき子供たち』の新訳を出す意味もあるな、と思ったのだった」と記している。

二種類の文庫本が、どこの出版社のものか明らかにしていないことから、翻訳業界の難しき、専門家（訳者）と出版社の微妙な関係を垣間見た気がしたが、時間が経つにつれ、あえて「分かりにくいところが多かった」と述べざるを得ないところに、専門家としてはこれくらいの言い方をするのが精一杯のことなのだろうと思うに至ったのである。

古典新訳文庫の訳者の一人（中条志穂氏）は、卒業論文で「恐るべき子供たち」を取り上げているとのことだから、「分かりにくい」ではなく、絶対的な確信を持って「誤訳である」と言えるだけの認識をもっているはずである。筆者のような一読者としては、もしそうなら、なぜ出版社に「はつきりとも申ししてくれないのか」と言いたいところだが、容易にはそうできない事情もあるのだろうと思う。

そこには、学会内の人間関係（師弟関係）が影響しているのかもしれない。指摘者と出版社との間で利害関係が生じている、あるいは将来的に生ずるかもしれないということも考えられる。他者の翻訳の誤りについて、偶然に気づいた一つ二つを指摘するならいざ知らず、全体を見渡して、誤りと思しき所を捜し出して検討するとなると、それに費やす時間、労力はかなりのものになる一方、それに対する見返りは何も期待できないどころか、「もの言えば、唇寒し・・・」の状況に陥るのかもしれない。あるいは、翻訳家の間には他人の翻訳についてとやかく言うてはならないという不文律があつて、誤訳に気づいたとしても、それはそのままにして「自然淘汰」に任せ、いっそ新訳を試みた方が賢明ということになるのかもしれない。

そもそも、「恐るべき子供たち」は人気のある作品であり、卒業論文や修士論文で取り上げられるのは、指折り数

えられるような数ではないだろうから、専門家なら誰もが自ら読んで、あるいは学生指導のなかで、岩波版には疑問を感じていたと考えるのが自然だろう。おそらく、そうした評価は、出版社の耳にも届いていたのではないだろうか。そうだとすれば、高名な先生の訳業に、素人でも分かるような誤りが多数見出されることも驚くべきことだが、それが修正もされず長い期間にわたって出版され続けてきたことは、もっと不思議なことである。

ここに取り上げるようなことは、本来なら、専門家が発言すべきことだと思う。しかしながら、専門家であるが故に発言しにくい事情もあるのだろうと考えた。自由にものが言えるのは、当事者たちとは何の利害関係もなく、無知をさらけ出した所で恥ずかしくもない素人しかいない、いや、もう少しインパクトのある言い方をするなら、問題の多い訳文を読まされてきた「被害者」こそ最適な発言者となり得るのではないかと思うに至ったのである。

ところで、本題に入る前に、強調しておきたいことが一点ある。

先に指摘したように、本稿執筆のきっかけは、筆者自身のフランス語学習の一助として始めた対訳本を使つての勉強にあったが、本稿執筆に当たつての観点は、フランス語

が適切な日本語に翻訳されているかどうかではなく（繰り返すことになるが、筆者のフランス語の実力は、そのような判断が出来るレベルには達していない）、日本語の文章としておかしくはないか、物語の進行に鑑みて翻訳文が不自然ではないかということにあつた。そうしたところに気づけば、翻訳なので当然原文に当たることになるが、フランス語からの移し替えについては筆者の手に負えない部分もあり、そうした点に関しては「他訳」を参考にさせていただくことにした。

本稿執筆に当って参考としたのは、以下の書籍である。  
 ・「恐るべき子供たち」 鈴木力衛訳 岩波文庫・初版は一九五七年だが、二〇一一年に改版され、私の手元にあるのは二〇一六年発行の第72刷である。（本稿では、岩波版と略記する）

・「恐るべき子供たち」 中条省平・中条志穂訳 光文社古典新訳文庫・初版は二〇〇七年。私の手元にあるのは、二〇一七年発行の第4刷。（以下、中条訳と略記する）

・「対訳 フランス語で読む『恐るべき子どもたち』」 塩谷祐人編著 白水社二〇一七年初版。（以下、対訳本あるいは塩谷訳と略記する）

・ Les enfants terribles, Jean Cocteau Le Livre de poche (1970) (以下、原文と略記する)

なお、三つの翻訳とも、本扉の裏面には、Les enfants terribles (1929) と記されている。一九二九年は本作品が出版された年であるが、それぞれの翻訳が当該の初版本を基にしたかどうかは分からない。塩谷訳には、Le Livre de poche (フランスの文庫本、二〇〇四年年版) を用いたとの記述があり、抄訳で対象としたページが記されていて、原文の当該部分を探すのに便利だが、筆者の手元にある同じ Le Livre de poche (一九七〇年版) とは若干ページがずれているので、改版時に活字の組み換えが行われたようだ。

以下に述べる、岩波版「恐るべき子供たち」で見つけた疑問点についての説明を判りやすくするために、作品のあらすじと主な登場人物を紹介しておく。

学校帰りの中学生が雪合戦に興ずるところから話の幕が開く。雪玉が当たって怪我をした主人公(ポール)は、学校の用務員室に運ばれ、そこで手当を受けた後、友人(ジエラル)に付き添われて車で帰宅する。家には、ポール

の姉(エリザベート)がいるが、この姉弟関係は近親姦姦的な仲と設定されている。作品のはじめと終わりにしか登場しないが、ポールが憧れているダルジュロスという名の兄貴格の中学生が、作品の影の主役ともいべき重要な役割を担っている。

雪玉での怪我とは別にポールには持病があり、医者や看護婦の訪問を受けながら治療に励むがなかなか改善が見られず、姉、友人等と転地療養に出かける。そして、転地療養の甲斐あって病が軽快して帰宅すると、姉弟にジエラルを交えた奇妙な共同生活が再開する。

その後、エリザベートが仕事に就き、そこで知り合った娘(アガート)が、姉弟のアパートに出入りするようになり、共同生活のメンバーは四人となる。このアガートの容貌がダルジュロスに似ていることが、四人の人間関係をややこしいものにし、悲劇の要因の一つとなっている。

第二部に入り、エリザベートは裕福なアメリカ人(ミカエル)と結婚するが、挙式直後、新郎は用事で出かけた南仏で自動車事故に遭い、亡くなってしまふ。後には邸宅と莫大な財産が残される。物語の後半では、その邸宅を中心に営まれる四人の共同生活が描かれるが、次第に人間関係に軋みが生じ、物語は悲劇的な結末に向かう。

### 岩波版「恐るべき子供たち」に見られる疑問点

今回筆者が本稿で取り上げた疑問点は、およそ五十箇所である(実際の数は、筆者が気づいただけでももう少し多いし、専門家が見ればさらに多くの誤訳や不適切な日本語表現が見つかるであろう)。それを、以下の五つのカテゴリーに分けて整理した。この五つはあくまで便宜的なものであり明確に区別できるものではないし、一つの疑問点が複数のカテゴリーに重複する場合もある。

- 一、単語の取り違えとも言うべき齟齬
- 二、腑に落ちない省略
- 三、訳語選択に関わる問題
- 四、不自然な、理解に苦しむ日本語表現
- 五、翻訳に当たったの状況理解に関する疑問

以下、このカテゴリー順に見ていく。文中のカギ括弧内の太字部分が、岩波版からの抜き書きである。傍線は筆者による。できるだけ、文章の流れを妨げないように、抜き書き及びフランス語表記は最小限に留め、文末の資料に、前後関係が判るように少し長めの抜き書きと関係するフランス語、筆者による簡単な説明を添付する。カギ括弧上の括弧数字は資料の通し番号で、資料は当該書のページ順に

形で並べられている。なお、文中に、たとえば、三―(33)参照といった表記をすることがあるが、カテゴリー三の(33)を参照していただきたいということである。

#### 一、単語の取り違えとも言うべき齟齬

本稿の観点で、日本語として判り難くはないか、小説の展開として不自然ではないかという点にあったと述べたにも拘わらず、フランス語からの翻訳の適否を問うようなことから始めることになってしまふが、それはこのカテゴリーが、客観的で分かり易いと考えるからである。

- (2) 「朝の十時半と、夕方の四時半には・・・」
- (28) 「部屋の劇場は夜の十時に開場した。」
- (25) 「そこには気違いの叔母とアルコール中毒の母親の影響があると断定したに相違ない。」
- (19) 「ジエラルの入って行く夢の世界は、まったく別個のものであった。」

(36) 「アガートは会話を混乱させる方法を発見する・・・」

(2)は、登下校時に、雪合戦の会場となる広場を子どもたちが通過する時刻のことを言っているが、傍線部は、原文では「四時」となっている。(28)は、主人公たちの独特な夜の遊びが始まる時刻で、原文では「十一時」である。(25)は、主人公の特徴が語られているところで、「母親」とあるの

は、原文では「父親」、(19)の「ジェラルド」とあるのは「ボール」、(36)「アガート」とあるのは「エリザベート」である。

一見、どれも些細なケアレスマイスのように見えるが、そうとばかりは言えない。(2)に関しては、少し先で、雪合戦は「四時十分から」始まるとあり、「四時半」にやって来たのでは間に合わないのである。また、文学作品の翻訳で、主人公の「父親」と「母親」を間違えるということは、あり得ることだろうか。さらに、「ボール」、「エリザベート」は、この作品の主人公姉弟の名前であり、しかも、原文には、代名詞ではなく個人名で書かれているのである。それを敢えて別人に置き替えるというのは、どのような理由があつてのことだろうか。

あまりにも初歩的な、敢えて言えば翻訳以前の問題なので、これらはミスではなく、訳者が使ったテキストが、現在我々が手にしているものとは違っていたのではないかとさえ思えてくる。同じテキストだったということなら、なぜそのようなことをしたのかは判らないが、意図的に変えたかと思えない。

「取り違い」の中には、原文の綴りが似ていることに起因すると思われるものはいくつかある。

(10) 「野次馬が(中略)赤い泥をじっと見つめていた。」

(46) 「彼女は一種のメカニズムに馴れており、そのかすかな物音にしか耳を傾けなかった。」

(22) 「二人は同じからだの二つの手のように、そのなかで生活し、洗ったり、着物を着たりするのだった。」

(10)は、雪合戦で怪我をした主人公(ボール)の周りに友だちが集まってきたところの描写で、傍線部は、原文では「赤い口」とある。「boue:泥」と「bouche:口」が似ていることによる取り違いと思われるが、雪玉が口に当たってそこから血を流している少年の傍らで、「口」ではなく、「泥」を見つめるという神経が分からない。(46)は、主人公の姉(エリザベート)がかすかな音にしか反応しなくなったことを説明しているところで、傍線部には「habiter:取りつく」の受身形が用いられており、「馴れる:habiter」は、それとの取り違いではないかと思われる。(22)は、姉弟の親密ぶりを述べているところで、傍線部は、このままで衣類の洗濯と読めってしまうが、原文は「自分の体を洗う:se laver」となっており、「洗う」なら別の単語(laver)を使うはずである。もつとも、自分の体を洗うのも着物を洗うのも「洗う」に違いはないので、間違いとは言えないのかも知れない。

(34) 「部屋のさまざまな顔が作りだす家庭的な雰囲気は一つの事実だった。」

「部屋のさまざまな顔」というのは、主人公の部屋に貼

られている映画スターのプロマイドのことである。述語部分が判かり難いが、それ以上に傍線部がおかしく、ここも取り違いの一つと考えられる。映画スターの特徴を表現するのに用いられている原語(Famille)には「家族、家庭、親族、一族」等の意味があり、どの訳語を選ぶかは、文脈をどう捕らえるかによつて変わってくる。三(33)に示してあるように、この抜き書きに先立つところで、プロマイドに写っているのは、「ごろつき」や「探偵」などあるもので、「家庭的」と言うのは馴染まないだろう。ここは、一つの家族のように似ていると言っているのであって、雰囲気家庭的ということではない。

このカテゴリーの最後に、代名詞の「取り違い」の例をあげておく。

(52) 「エリザベートの叫びは、姉弟が死の世界を構成する

音調よりも低く響き渡る。」

物語の終局間近、登場人物の人間関係に軋みが出てきた頃のことである。抜き書き部の直前に「アガートが嘆いている」という一文がある。傍線部の原文は「彼女の叫び」と、代名詞(厳密には所有形容詞)で表記されていて、彼女(彼でもかまわない)が誰なのかは自明ではないが、ここでは、エリザベートが叫んでいるという状況ではなく、

「アガートの嘆き」を受けていると見るべきであろう。

この最後の例は、単語(代名詞)の取り違いというよりは、訳者が状況をどう理解しているのかということと密接に関連しており、この点については、改めて取り上げる。

## 二、腑に落ちない省略

翻訳においては、説明のために言葉を補ったり、分かりやすさを考えて省略したりすることはありうるだろう。そもそも、翻訳作品は原作とは別のものであるといった考えもあるのが、加筆や省略ということを問題にすること自体がおかしいと言われるかもしれないが、そうした処理が、判りにくさを増大させるようになってはならないだろう。

筆者が気づいただけで、数語ないし一文が省略されているところが数カ所ある。

(13) 「若いジェラルドが自分の毛糸のマフラーと外套で包むのを見届けると・・・」

(15) 「ボールは死んでしまう。いまに死んでしまう。」

(30) 「我は愛す、(中略)そのけばけばしきスカートを、

その大きな、いびつのショールを、\*\*\*」

(43) 「彼女(アガート)はこの部屋の魔力と、ボールとの親密な交際から離れていくのを悲しんで、人知れず泣いた。」

(13)は、怪我をした主人公を家まで送る車内の描写だが、包むという他動詞の目的語が省かれているために、何を包んだのかが判らない。原文には「同級生を」と目的語が明示されている。(15)も、車内の描写の続きだが、抜き書き部のようにつぶやいた内容を、すぐその後で打ち消す「それを信じてはいなかった」(中条訳)という重要な一文が省略される。(30)は、主人公が朗読したボードレールの詩の一部で、\*部にあるべき三語が省かれている。ここには、前行の「けばけばしき」と韻を踏んでいる単語が含まれており、日本語にしてしまえば判らなくなってしまうが、省いていいはずはない。(43)では、この抜き書き部に続いて、「夜はどうなってしまうのだろうか？」(塩谷訳)というアガートの心情を表す重要な一文が入ることになっている。上記四例は、原文に書かれている言葉を無視したような形での省略だが、次の省略は、それとは異質なものである。(37)「アガートはボールの傲慢さとボール自身に眩惑された。\*\*\*。というのも、傲慢さは人を魅力的にするものであり・・・」

**屈強の広場であり・・・**

(7) 「ダルジュロスは学校の雄鶏であった。」  
 (16) 「彼はボールを見張っている。」  
 (33) 「彼女(エリザベート)はボールが壁の上にピンでとめているアパッチや①、探偵や、アメリカのスターたちのすべてが、孤児のアガートや、ダルジュロスにアタリー②に似ていることに気がついた。」  
 (39) 「自己のなかに沈潜するには、彼らにとって不可能な訓練を必要とする。」  
 (40) 「この写真は、無実なものではなかった。」  
 (41) 「彼(ボール)は、(中略)スポーツマンらしい青年がジェラルドと一緒に(中略)みんなを車でどこかへ連れ去るのを発見した。」  
 (3)は、子どもたちがたむろする広場のことを言っているのだが、「屈強の」が、どの原語を訳したのか判らないし、その訳語でどんな広場を想像すればいいのかも判らない。(7)のように言われれば、誰だって「ダルジュロス」というのは、学校で飼っているニワトリのことと思うであろう。(16)の「彼」は、雪合戦で怪我をした親友(ボール)を車で家まで送っていくところである。そのボールを「見張っている」と言うのはどういうことなのか。ボールは敵だったのか、逃げ出そうとしているのか、と余計なことを考えて

視して前の文に強引に(?) 結合させてしまった結果、訳の分からない文になっている。

上記五例のうち、最後のものを除いて、ここも、先に見てきた「単語の取り違い」と似たところがある。つまり、見落としや勘違いによるというよりは、意図的でなければ、こうした省略(脱落)は起きないだろうと思うのである。最後の省略については、前カテゴリーの最後に述べたことと同様、統語論上の問題とともに、語られている状況をどう理解しているかという、いわば語用論上の問題も含んでいると考えられる。

**三、訳語選択に関わる問題**

専門家なら、一つの単語にいくつもの意味があることは十分に承知しているであろうし、翻訳に当たっては、初級学習者の手元にあるような簡便な辞書ではなく、何冊もの専門的な書を身近に置いての作業となるであろうと想像する。だからこそ、翻訳出版されたものには、最も相応しい言葉が選ばれ、適切な日本語に置き換えられていると信頼して、読んでいるのである。しかしながら、そうした信頼が裏切られるような訳に頻繁に遭遇するのである。

はじめの七例は、滑稽とも言える訳である。

(3)「それは、(中略)切手やビー玉の取引所を開くのに

しまう。(33)は、主人公の部屋に貼ってあるプロマイドについて述べたもので、傍線部①はこのままだとアパッチ・インディアンかと思ってしまうが、「ごろつき」という意味もあるようだ。また、傍線部②のアタリーは、このように記述されると、ダルジュロスの姓のように読めてしまうが、これは彼が以前に芝居で演じた役割の名前で、「アタリー」に扮したダルジュロス」(塩谷訳・中条訳)ということのようだ。つまり岩波版の訳者は、芝居のことを忘れていたか、この部分を訳した訳者は、芝居のことを知らなかったということになる。(39)は、一見高尚なことを言っているように見えるが、少し考えてみれば、吹き出したくなるような訳である。(40)の傍線部はどういうことを言っているのか、よく分からない。写真は無実ではないと言っているわけだから、写真には罪があるということになるが、よく分からない。原文には「無害ではない、副作用がない」という意味の単語が用いられており、その否定だから、有害だ、危険だというほどの意味になる。写真に写っている人物が、主人公たちにとって危険人物だということなら、意味は通じる。(41)は、自分の待っていた人物が、他の人に連れ去られてしまうのを目撃したという場面である。人っ子一人いないような辺鄙な所を歩いていて、ようやく人に会ったというなら、「一人発見!」という言い方をするかもしれない

いが、そういう状況ではない。これは、(16)の「見張っている」と同じような訳語選択と言える。

以下の七例は、いずれも不自然な日本語である。

- (4) 「地面はもう硬くて、泥んこになっていた。」  
 (5) 「新しい戦闘員が、一人なり、二人ずつなり、やっつて来るにつれて・・・」

(14) 「ジェラルルは、車の隅で右と左に揺られている哀れな顔を眺めていた。」

(17) 「その（サイレンの）音は耳をつんざくような、人間的な、非人間的なものとなり、・・・」

(21) 「学校へ行くなんて、もう問題じゃないね。」

(31) 「金持ちになった貧乏人は、贅沢な貧しさをひけらかすであろう。」

(35) 「マリエットは、冷たい夕食を残して行った」

(4)は、こどもたちによって踏み固められた雪道の描写だが、普通「泥んこ」と言えば、ぬかるんでぐちゃぐちゃしている状況を言うのであり、傍線部のように言われると状況の想像が困難になる。(5)は、雪合戦に参加するこどもたちが集まってくる様子を述べたものだが、傍線部はどのようなやっつて来方を言っているのだろうか。(14)は、怪我をした友人を送る車の中の様子だが、これでは、ジェラルルの両側に揺れている顔があるように読めてしまう。普通は「右

に左に」と言うところだろう。(17)も、友人を送る車の場面で、どこからか聞こえてきた緊急車輛のサイレンについての描写である。確かに原文は、傍線部の二語に対応する単語で書かれているが、そのまま日本語に置き換えたところ

で意味の通じる文になるわけではない。(21)は、雪合戦で怪我をしたポールを診察した医者言葉である。怪我の他に持病もあって医者の往診を受けているわけだから、傍線部は「学校に行ってはいけない」ということだろうとは想像するが、直前の医者セリフに「大丈夫だよ、気にすることはない」とあるので、「学校に行っても、問題はない」と読めてしまう。(31)は、お金に不自由していない人たちに

ついて言っているところで、「貧しい贅沢」（中条訳）と前後を入れ替えただけで、ストンと胸に落ちる表現となる。つまり、成り上がり者は贅沢に振る舞っているつもりでも、お里が知れてしまうということを言っているわけで、それは「贅沢な貧しさ」では表現できない。これは、フランス語の知識云々と言うより、日本語表現への精通が問われるところであろう。(35)は、主人公の世話を焼いている看護婦（家政婦）の行動を言っている。傍線部がこのままだと、マリエットはひどい看護婦に思えてしまうが、「温めなおす必要のない夕食」（中条訳）と言われると、家政婦に対するイメージが正反対になっってくる。

次の二例は、どのような訳語を選ぶかということに加え、もつと大きな問題を含んでいるように思う。

(45) 「自分は若い娘と学生①のあいだに生れた偶然の一致

彼の武器を訪るか③を、そしてまたその武器が照準し、心を発見する④ののいかに遅いかを知った」

エリザベートが連れてきた「若い娘」（アガート）が、自分（ポール）が憧れていた「学生」（ダルジュロス）に似ていることに気づいたポールの心境を述べているところである。傍線部①はアガートとダルジュロスのこと、傍線部②は二人が似ていることを言っているが、そう読み取れるだろうか。筆者ははじめ、ポールの出生について語られていると読み取ってしまった。傍線部③の「彼」は、このまま読めば、ポールということになると思われるが、そうだとすると文の意味は判らない。「訪れる」に対応する原語 (visiter) には、「調べる・検査する」という意味がある

るので、それを使えば、ここは、「運命が自分自身の武器を検査し」と、やや難解ではあるが意味の通る日本語にはなる。傍線部④は、武器が照準を合わせるということらしいので、「心」は「心臓」と訳した方が良さそうだ。塩谷訳では、「運命がどれほど念入りに武器を点検し、狙いをつけ、心臓に照準を合わせるまでに時間をかけるのかを

知ったのである」となっている。

(50) 「『こいつは薬①だ。薬になるんだ②。毒になんかになるものか③』ポールはそう云って・・・」

物語の終局部、ジェラルルが久し振りに会ったダルジュロスから預かってきた包みを開いているところで、傍線部①の原語 (poison) には「麻薬」の意味があり、広義には薬かもしれないが、読者を誤解に導く訳である。傍線部②は明らかに訳者の「創作」で、原文は「彼は麻薬をやっている」である。傍線部③も同様で、「彼が毒をくれることではないだろう」である。

#### 四、不自然な、理解に苦しむ日本語表現

ここで扱うことは、訳語が適切に選ばれたかという意味では、前カテゴリーで扱ってきたことと同じとも言えるし、状況をどう理解して当該の訳語を選んだかという意味では次で扱うべきことかもしれない。いずれにせよ、ポイント

は日本語としての不自然さ、文章の判りにくさということである。

(8) 「この青白い顔の生徒（ポール）は、（中略）怪しげな道具でふくらんだ上衣のポケットの前に出るといっも途方にくれてしまうのだった。」

(9) 「雪は飛び交い（中略）あちこちから、くらがりのあ

いだに、口を開いた赤い顔や、目標を指し示す手が、暗闇の中にくっきり浮かんだ。」

(42) 「彼女(エリザベート)の心は、部屋のすみずみまでパツと明るくなった。」

(8)について、目の前にいる友人の上衣のポケットが膨らんでいるというときに、傍線部のような言い方は、普通しないだろう。原文を直訳すれば、「興味をそそるポケットのついでに上衣」である。(9)は雪合戦の一場面についての描写だが、二つの傍線部は明らかに重複している。原文に「二つの夜(闇)」と訳せる所があるので、原文に忠実に(?)暗がりをついにしたということだろうか。(42)では、主語と述語の関係が捻れている。捻れを解くなら、述語を「明るくした」としなければならぬ。ただし、原文の述語は、「広がった」となっていて、捻れてはいない。

次の五例は、何度読んでも理解出来ない。こうした意味の分からないような文こそ翻訳文と珍重された時代があったのかもしれない。

(23) 「ジェラールは毎日やって来て、悪罵の嵐に迎えられた。(中略)穏やかな習慣が彼をこのようなもてなから免疫にしている。」

(26) 「この戦争だけが、漸進的な変貌の唯一の動機ではなかった。子供たちの魅力もそこに働いていた。」

(27) 「そういう少女たちは、離れたところにいるので、足蹴の戦争と取りすました顔を、まるで構成されたように眺めることができるのだった。」

(32) 「その晩から、ポールとアガートのあいだには、交錯する糸の①布地が織りなされた。時の復讐が特権を逆転させた②。」

(38) 「熱がいびつな鏡で部屋をとりかこんでしまう。そんなときアガートは憂鬱になり・・・」

どの抜き書きにおいても、原語に傍線部のように訳せる単語が使われているが(ただし、(27)は、直訳すれば、「構成された舞台の上のように」となる)、それをそのまま日本語に置き換えたところで意味の通じる文になるわけではなく、意味の通じる言葉に置き換えるために訳者はいるはずである。

(23)は、ポールの見舞いに訪れるジェラールは、親しさ故に姉弟から手荒な言葉で迎えられるが、それも何度も繰り返すうちに馴れてしまうということを行っている。(26)と(27)は、転地療養に行った先でのエピソードである。「戦争」というのは、ホテルの食堂のテーブルの下で、エリザベートがポールの足を蹴ることを言っているのだが、いずれも傍線部は何を言おうとしているのか判らない。その原因は、(26)については、「戦争が」という主語と「動機ではなかつた」と取り上げる。

た」という述語がスムーズに結びつかないこと、(27)については「構成されたように」という形容動詞が「眺める」という動詞にスムーズに結びつかないことによるものと思われる。(32)も判らない表現だが、傍線部①は「糸で」とすべきである。傍線部②の「時の復讐」は、「時間が戻る」ということを言っているらしい。(38)の「熱」は、原文ではストーブや太陽の熱ではなく体温が上がっているということを書いており、傍線部は、高熱によってもたらされた幻想を述べている。「熱」をどう理解するかということもさることながら、これも主語と述語とその間にある補語・目的語の関係が不自然なのである。

五、翻訳に当たっての状況理解に関する疑問

最後のカテゴリーでは、訳者が、翻訳しようとしている場面について、どのような状況を想定しているのかということに関係している。先にも指摘したように、これは語用論に関係した論点と言える。翻訳に当たっては、訳語選択が先なのか状況理解が先なのか、素人の知るところではないが、相互に関係しているとすれば、ここで扱うことは、「三、訳語選択に関わる問題」とも「四、不自然な、理解に苦しむ日本語表記」とも関係している。

はじめに、登場人物の動きが、原文と一八〇度異なるも

(24) 「医者(看護婦や同居人たちに指示を出した後、自分の家に)帰って行くのであった。」

(47) 「(結婚式場の主人公たちの行動が描かれ)そこに死のような沈黙のしかかっていた。」

(24)は、原文では、医者が往診先で出した指示が守られているかどうかを確かめに「往診先に戻って来る」という状況を描いていて、「(家に)帰って行く」のとは正反対の動きを言っている。(47)で、傍線部のように言われれば、直前に話題になっていた結婚式場のことと考えてしまう。傍線の直前に、エリザベートが、この結婚を素直に喜べない旨の一文があり、「そこ」がエリザベートの心中を言っているなら理解出来なくもないが、原文には、明確に「式の外では」とあるので、これも正反対の意味になる。

次の五例は、正反対というのとは少し異なるが、内容的には原文と矛盾しているものである。

(11) 「(怪我をした主人公を)家に帰らせようとした。」

(12) 「(雪合戦の状況について質問され)一人の生徒がジェラールの代わりに答えた。」

(29) 「(子供同士の夜の遊び場面で)ポールが着物を脱ぎ・・・ジェラールが部屋を探してやる。」

(44) 「孤独で暮らすというポールが胸に温めていた計画も、

アガートが出て行ってしまったために、**実現不可能**になった。」

(51) 「ポールは彼女（エリザベート）の後を追った。ポールはやって来た。（中略・ポールは）アガートの嘆きをもう聞いてはいないのだ。姉と弟はいかにして、それを聞くことができるようになったのか。」

(11)では、この時点で主人公は気を失っているのに、帰れる状況にはない。原文を逐語的に訳せば、「彼自身に戻る」という意味になり、戻るのは「家」ではなく「彼自身」ということ、つまり「意識を戻そうとした」ということになる。(12)のように言ったすぐ後で、質問には「ジェラルが答えた」という前提で話が展開しているのに、訳者が状況をどう理解していたのか、心配になるのである。傍線部の原文は「ジェラルと言う名の生徒が」である。(29)は誤りというのではないのかも知れないが、このすぐ後に「ポールは素裸で」とあるので、ジェラルが探していたのはポールの部屋ではなく、自分の部屋だったとするのが自然であろう。(44)では、ポールが抱いていた「孤独で暮らす夢」は、アガートたちが出て行ったために現実のものとなったのであるから、全く矛盾した訳文である。ここは、孤独を夢見ていたものの、実際に一人になってみると「耐えられないものだった」となっている原文を、「実現不可

能だった」と読み違えたのかもしれない。(51)には二つの問題点がある。一つは前段の「後を追った」「来た」で、ここでは物理的な移動を言っているのではなく、ポールはエリザベートに付き従ってきたという心理的な追従を言っているという点。もう一つは後段で、「（ポールは）もう聞いてはいないのだ」と言っておきながら、すぐその後で「弟（ポール）はそれを聞くことができるようになった」と矛盾したことを言っている点である。

以上は、訳語選択の適否と同時に、状況をどう理解して翻訳に当たっているかという、本質的な問題を含んでいる。

次の三例は、読者を間違えた理解に導くものである。

(6) 「（ポールは）ひとだかりのなかを抜けて（中略）歩いて行った。」

(18) 「ジェラルは自分①の握っている手が暖かいこと、

（中略）自分②は夢の世界に遊べるのだ（中略）自分

③はいま夢の世界に遊んで（中略）自分④は夢の世界に遊んで……」

(20) 「……大人が気絶する……エリザベートが気絶する……」

(6)のように言われると、ポールは、人だかりの一員だったように読み取れるが、実際は、近くを通っただけで、人だかりに加わっていたわけでも、そこを突っ切って行った

わけでもない。(18)に四回出てくる「自分」は、どれも「ジェラル」と読める。原文ではいずれも「彼」という代名詞で表記されており、傍線部①はジェラルのことなので、「自分」で間違っていないが、後の三つの「彼」は、ポールのことと理解しないと意味が通じないので（資料(18)にあるように、「夢の世界に遊ぶ」というのはポールとエリザベートの特権として描かれている）、「自分」ではまずいのである。しかも、これに続く一文で、「ポール」と個人名で書かれているにも拘わらず、「ジェラル」となっていることについては、一(19)で指摘した。(20)について、原文では「大人」も「エリザベート」も気絶はしていない。前者は、原文では「大人にとつての気絶の意味」となっている。後者については、原文では「気絶」という女性名詞を、三人称単数女性形の代名詞で受けているのだが、三・単・女なら「エリザベート」と勝手読みした結果、エリザベートを気絶させる結果になったと思われる。

以下の二つは、訳者がどのような情景を想定しているのか理解出来ない翻訳である。

(1) 「カーテンのついたガラスが屋根の上のっている」

(49) 「（友人から預かってきた秘密めいた包みを開けると

ころで）それは一匹の爬虫類からできており……」

(1)は、雪合戦の行われる広場を取り囲む建物についての

描写である。屋根に開いた「天窗」のことを言っているらしいのだが、この訳文からは、そのような情景は思い浮かばない。(49)では、「爬虫類からできており」と断定しているが、別に、蛇やトカゲが出てきたわけではない。原文は、一匹の爬虫類のように見えるが、実はたかさんの蛇が絡み合っているようで、と読める。つまり、実際に爬虫類がいるわけではない、奇妙な爬虫類のように人々の目を引いたと言っているのである。妙な所で断定した結果、後がうまく続かなくなってしまうところか。

最後に、三者三様の訳の一例について触れておこう。

原文の受け止め方、その日本語による表記には、訳者による違い（ニュアンスの違い）のあることは当然のことである。しかしながら、資料の(48)に示した点は、ニュアンスの違いと考えるといいものかどうか。ここでは、ポールの質問に対するジェラルの返答が、一番短いもので一センテンス（中条訳）、二番目が二センテンス（塩谷訳）、最も長いのが六センテンス（岩波版）となっている。

私たちは、何を読まされてきたのか

岩波文庫版「恐るべき子供たち」をはじめて手にしたのは学生時代のことだから、およそ半世紀ぶりの再読という

ことになる。雪合戦や車での事故死の場面など、所々覚えているところもあったが、日本語表記のおかしさや物語進行上の不自然さといった側面については、特に注意して読んで記憶はない。

今回の再読のきっかけは、先にも述べた通り、筆者自身のフランス語学習の一助としてである。原文を読み、自分のフランス語理解が正しいかどうかを確認するのが、再読の主たる目的だったが、それを達成することはできなかった。岩波版には、先に見てきたとおり、さまざまな形で疑問点が見出されたからである。それらは、質、量ともに、不注意によるミス、訳者によるニュアンスの違いといった言葉では言い表せるようなものではなかった。

はじめのうちは、偶然見つけた疑問点を、他訳書やフランス語の原文に当たって自分なりに理解しようと試みてきたが、それが結構な数に上り、自分のフランス語理解が正しいかどうかということより、日本語の不自然さ故に、岩波版の翻訳が正しいのかどうかということの方が気になりだしたのである。探し出した疑問点とそれに対する筆者の考えは、前節及び巻末の資料に示す通りだが、このように文章としてまとめながら、この作業の着地点はどこになるのだろうか、思わないこともなかった。

勿論、言い放しで終わってしまうことは本意ではないが、

長い年月にわたって世に出回っている書物に対する一読者の素朴な疑問が、真剣に取り扱ってもらえるものかどうか何とも心許ない。

訳文についての疑問は、筆者の中ではほぼ解決しているが、岩波版「恐るべき子供たち」がこのままの形で世に出回っているかという疑問は残ったままである。

当該書の初版は一九五七年ということだから、六十年前の上にもわたって発行され続けてきたことになる（三年前の発行で第72刷！）。岩波版で「恐るべき子供たち」を読んだと言う人は、おそらく何百万人というわけだが（筆者もその一人であった）、その人たちは本当にこの作品を読んだことになるのかと、今では大いに疑問に思うのである。

今回の作業を続けながらたどり着いた一つの結論は、岩波版の翻訳は、鈴木力衛氏の手になるものではないであろうということであった（それで鈴木氏の責任がなくなるというものではないが）。

このように考えるに至った根拠の一つは、あまりにも初歩的な誤りが多いからである。「単語の取り違い」や「腑に落ちない省略」「訳語選択の問題」として取り上げたことは、外国語を専門にし、それを学生に教えるような立場にある人なら、決して犯すことのない誤りと思うからである。特に、明記されている時刻や固有名詞で表記された人

名を、別の時刻や名前に置き換える、「父親」を「母親」と訳す、肝心な語句を省略するなど、初学者でも犯すこととはないと思うのである。

以前手にした本で、大学の教員が授業で学生に訳させたものを、そのまま自分の翻訳として出版していたことがあると書いてあるのを読んだことがある。そのときは、話を面白くするための多少の脚色表現と思っただが、あながちありえない話ではないと思うに至った。

昨今、外食産業に勤めるアルバイト学生の悪ふざけがSNS等を通じて拡散し、社会問題として報じられることがあり、「バイト・テロ」の呼び方まで生み出されたが、それと同じようなことを想像するのである。

時刻や人名を変えたり、辞書にも載っていない滑稽とも言える訳語を考えたりするのは、「うっかり」で出来ることではない。先生から翻訳のアルバイトを頼まれた（授業で指名されたのかもしれない）学生が、ちよつとイタズラを試みてみたくなった（あるいは、多少の悪意を持ってやっただけかもしれない）が、チェックした先生が気づいて訂正するものと考えてのことだった。しかし、学生を信頼していた（単に、忙しかっただけかもしれないが）先生は、確認をせずそのまま出版社に送ってしまった。編集者は問題点に気づいたが、威厳ある先生に物言えず、当の学生は

出版された本を見て驚いたが、最早取り返しつかない・いや、出版社も気づいていなかったということもある。・そんな風に考えると、説明がつくように思うのである。いや、出版社も気づいていなかったということもあるのかも。あるいは、フランス語からの訳の適否という点については編集者が口を挟めるようなことではないかもしれないが、これだけの日本語表記の不自然さについては、気づけば、そして、訳者存命中のことなら、いくらでも訂正ができたと思うのである。

当該文庫が鈴木氏の手になるものではないと考えるもう一つの根拠は、「不自然な、理解に苦しむ日本語表記」および「翻訳に当たった状況理解に関する疑問」で見えてきたように、日本語としての文章の稚拙さ、小説に描かれている場面についての理解の不適切さ・曖昧さが多いからである。筆者は、鈴木氏個人がどのような文章力を持つ人かは知らないが、文学を専攻する専門家であり、読む・書くという経験は一般の人よりも多かったらうと考えると、岩波版の日本語の文章は、そのような立場、経験のある人の書いたものとは思えないのである。訳者自身にも意味が分かっていないであろうと思えるような直訳調の訳文にも閉口するが、「聞いてはいない」と言っておきながら、その後「聞くことができるようになった」と、平気で矛盾したことを書くような状況理解のまずさは、翻訳に当たっ

ての致命的な欠陥と思うのである。

嫌らしい言い方になるが、筆者個人にとつては、当該文庫に接したことは、今では貴重な経験だったと受け止めている。原文・他訳書も含めて、何度も読み返すことができずにおかげで、たいていの本は、読み終わるとすぐにその内容を忘れてしまうが、この本については、今のところ、比較的よく覚えていられるのである。

筆者としては、当該文庫の実態についてはそれなりの理解が得られたので、今後は一定の距離を置いてつき合っていけばいいわけだが、これからこの文庫本を手取る人たちには、この経験と認識を、どう伝えたものだろう。換言すれば、ここに提示してきた疑問点について、出版社としての情報提供とそれへの対応策を示すことが、やや遅きに失した感はあるが、出版社の社会的責任を果たすことにならぬのではないかと思うのである。筆者が一番あつてほしくないと思つていることは、岩波版が、誰も知らないうちに書店から姿を消してしまうことである。

\*ここに取り上げたことについて、業界ではすでに話題になり、一件落着いているのかもしれない。そうだとすると、当該文庫は改訂されることなく出版され続けているので、読者を迷わさない翻訳を一刻も早く見たいと思ひ、執筆した。

資料

カギ括弧内の太字が岩波文庫版「恐るべき子供たち」からの抜き書きである。括弧数字は資料の通し番号、p数字は岩波版の掲載ページ。傍線は筆者による。

(1) 「(中庭を取り囲む)アトリエには写真屋の持つているような、カーテンのついたガラスが屋根の上のついでいるが・・・」<sup>p7</sup>

物語の冒頭、学校帰りの中学生たちが雪合戦に興じる広場(中庭)を取り囲んでいる建物についての描写である。傍線部のように言われると、災害地のブルーシートか太陽光発電のパネルを想像してしまうが、多分そうではないだろう。「・・・邸の上の部分はガラス張りになっていて・・・」(塩谷訳)、「・・・天辺が(中略)暗幕のかかったガラス張りになっていて・・・」(中条訳)とあり、屋根に開いている天窓、あるいは壁の高所に取りつけられた明り通りの窓について述べているのだろうと理解した。

(2) 「しかし、一日に二度だけ、朝の十時半と、夕方の四時半には、餓鬼大将の群れがこのあたりの静けさを掻きみだす。」<sup>p8</sup>

これも物語の冒頭、雪合戦の舞台となる広場(中庭)についての描写である。「一日に二度だけ」という表現にも

違和感があるが、問題は時刻である。二つの時刻は子ども

たちの登下校の時刻を言っているが、原文では、傍線部は四時半ではなく四時となっている。四時でも四時半でも、どちらでもいいと思われるかもしれないが、それに続く所では、「四時十分から、雪合戦は開始され」と、この時刻は原文に忠実に訳されている。つまり、四時に学校を終えた子供たちが、ただちに中庭に入り込み、四時十分には雪合戦が始まるという設定であり、四時半に入つて来たのでは、戦いには間に合わないのである。ここは、単なる時刻の間違えということではなく、訳者が状況をどう理解したかということも関連していると思われる。

(3) 「それは一種の中世風の広場で、(中略)切手やビー玉の取引所を開くのに屈強の広場であり・・・」<sup>p8</sup>

これも、子どもたちが雪合戦を行う広場についての説明であるが、傍線部から、読者は、どんな広場を想像すればいいのだろう。「屈強」に該当する言葉は、原文にはなく、それらしい言葉を手元の辞書で調べてみると、「強盗などが出没する危険な場所、伏魔殿、賭博場」とあり、他訳では、「危険な場所」(塩谷訳)、「危険地帯」(中条訳)となっている。

(4) 「学校へ出かけた生徒たちが、こねたり、踏んだり、かきませたり、滑ったりしたせいか、地面はもう硬く

て、泥んこになっていた。」<sup>p10</sup>

雪の日に、中学生たちが通過していった路地についての描写である。普通、道が泥んこになっていると言ったら、ぬかるんでいて歩きにくい状況を想像する。それ故、傍線部は、矛盾した表現と言える。読者としては、地面は硬いのか、柔らかいのかはつきりして欲しいと思うのである。中条訳では「地面は泥まじりで固まっていた」とあり、これならすんなりと情景を思い描ける。

(5) 「新しい戦闘員が、一人なり、二人ずつなり、やって来るにつれて・・・」<sup>p11</sup>

雪合戦への参戦者が増えて行く様を述べたところであるが、訳者はどのようなやつて来方を想定して、傍線部のような訳語を選んだのだろう。原文は、筆者には分かりにくい表現になっていて、中条訳では「ひとりふたり」となっている。

(6) 「青い顔の生徒は、ひとだかりのなかを抜けて、雪つぶての降りしきるほうに歩いて行った。」

これも雪合戦中の一コマである。完全な間違いとは言えないのかもしれないが、読者を迷わす訳と言える。青い顔の生徒というのは主人公のポールのこと、ひとだかりというのは、雪合戦で捕虜になった敵方の生徒が訊問を受けている状況を言っている。傍線部のように言われると、ポー

ルも訊問に加わっていたように思えるが、彼は近くを通りかかっただけで、「ひとだかり」の一員ではないし、そこを突っ切って行ったわけでもない。原文では、そのグループを「迂回して（避けて）」という単語が使われており、中条訳では「この一群をよけて通り」となっている。

(7) 「ダルジュロスは学校の雄鶏であった。」<sup>p13</sup>

物語の初めの部分で、主人公が懂れているダルジュロスという男子中学生（次第に分かって来るが、彼はこの作品の影の主役ともいえるべき存在である）の、学校内での立場（地位）について言っているところである。はじめ、ここを讀んだとき、まだ登場人物の紹介が済んでいないということもあって、ダルジュロスというのは、学校で飼っている鶏のことかと思っただけである。中条訳には「ダルジュロスは学校の花形だった」とあり、辞書を見ると、cockには「雄鶏」の他に「伊達男」の意味もあると出ている。

(8) 「この青白い顔の生徒（ポール）は、ダルジュロスの

（中略）怪しげな道具でふくらんだ上衣のポケットの

前に出るといつも途方にくれてしまうのだった。」<sup>p13</sup>

主人公のポールは、懂れているダルジュロスの上衣のポケットが、なにやら怪しげなもので膨らんでいると、それに気圧されてしまうということを書いているのだが、「ポケットの前に出る」という言い方は、普通はしないだろう。

傍線部の原文を逐語訳すれば、「興味をそそるポケットのついている上衣」であり、中条訳では「ポケットが怪しく膨らんだ上衣の前に出ると」とある。

(9) 「雪は飛び交い（中略）あちこちから、くらがりのあいだに、口を開いた赤い顔や、目標を指し示す手が、  
暗闇の中にくっきり浮かんだ。」<sup>p13-p14</sup>

雪合戦の場面である。二つの傍線部が明らかに重複している。訳者がこうした訳文を作ってきたとして、編集者は何の違和感も感じなかったのだろうか、違和感を感じても、もの言うことははばかれたということなのだろうか。原文には、逐語訳すれば「二つの夜（闇）の間に」と訳せるところがある。夜が早く訪れる冬の夕方のことである。敵と味方がそれぞれ暗闇に身を潜め、雪玉を投げ合っている様を描いているのではないか。岩波版は、二つの闇を尊重した結果、このような訳文になったということだろうか。

(10) 「何人かの野次馬が少年のまわりにひしめき合い、助けようともせず、赤い泥をじっと見つめていた。」

<sup>p14</sup>

雪合戦の最中に雪玉が口に当たり、地面に横たわって口元から血を流しているポールの周りに、仲間たちが集まってきたところである。傍線部に該当する原文は「赤い口… bouche rouge」である。そこを「赤い泥」としたというこ

とは、「Bouche:口」と「boue:泥」を取り違えたということだろうか。それにしても、雪玉が口に当り、そこから血を流している少年の傍らで、野次馬とは言え、「泥を見つめていた」とした訳者は、どのような心情を想定したのだろうか。いや、それよりも、暗くなった冬の夕方のことである。血で染まっていたとしても、その土が赤く見えるものだろうか。

(11) 「小使い（学校用務員）の細君は気のいい女で、少

年の体を洗ってやり、家に帰らせようとした。」<sup>p16</sup>

雪合戦の最中に少年が怪我をしたということで、学校関係者が駆けつけ、彼を用務員室に連れて行って看病している場面である。肝心なことは、この時点で少年（ポール）はまだ気を失っていて、家に帰れるような状態ではないということである。その後しばらく、雪合戦に興じていた生徒たちに対する事情聴取が行われ、その中に「ほら奴さん、目を開けましたよ」となるのである。傍線部に該当する原文（Feverir a lui）は、逐語的に訳せば「彼自身に戻る」といった意味で、家に帰らせるのではなく、「意識を取り戻させようとした」（塩谷訳）、「目を覚まさせようとした」（中条訳）ということのようである。

(12) 「するとそのとき、一人の生徒がジェラルルの代わりに

に答えた。」<sup>p16</sup>

雪合戦仲間に対する事情聴取の場面である。この抜き書き部を讀んだだけでは分からないが、傍線部は物語の展開として明らかにおかしいのである。なぜなら、この一頁ほど後に、「ジェラルルの代わりに答えた」と言われた生徒の発言内容を、「ジェラルルはどうかしているんです」とジェラルルの発言として言い訳する場面があるからである。この部分は会話が続くところで、誰がどの科白を言っているのか、はっきりしないこともあるが、他訳では、「ジェラルルが言った」としている。傍線部に該当する原文（Je m'ose）には「くの名において」「くの名前で」「くを代表して」という意味があるので、そうした訳が与えられたのかもしれないが、そうだとすれば、訳者は、状況をどのように理解していたのか、改めて訝しく思うのである。

(13) 「若いジェラルルが自分の毛糸のマフラーと外套で包

むのを見届けると・・・」<sup>p19</sup>

雪合戦で怪我をしたポールと彼に付き添うジェラルルとを乗せた車が、家路に就く場面である。傍線部「包む」は他動詞なのに目的語が省かれているので、何を包んだのか分からない。原文には、彼の同級生（son condiscipule）と目的語がはっきり書かれている。敢えてこの語を省いて分かり難くする理由はどこにあるのだろうか。

(14) 「ジェラルルは、車の隅で右と左に揺られている哀れ

な顔を眺めていた。」<sup>p19</sup>

車の中の続きである。曲がりくねった道を行く車の中で体が左右に揺れる様を言っている。好みの問題ということになるのかもしれないが、このようなときに、傍線部のような言い方は、普通しないだろう。ここは車の中の連続的な動作なので「右に左に」が自然だと思われる（原文は、*de gauche et de droite* じゃあ）。  
 たまたま読んでいたカミュの小説「ペスト」に、髪の毛の右と左に垂らしているという描写があった。原文は、*a gauche et a droite*で、「左右に」と翻訳されているが、ここは、「右と左に」でも全く違和感はない、二つの前置詞の違いを反映した訳については手元の辞書に載っていないので、専門家の助けが必要である。

(15) 「ポールは死んでしまう。いまに死んでしまう。」<sup>p20</sup>  
 同じく車の中の様子である。ぐったりしているポールの横で、ジェラルルがつぶやいた言葉であるが、これに続く一文（単語五つ分）が完全に抜けている。翻訳なので、省略や加筆はありうると思うが、ここで省かれているのは、「それを信じてはいなかった」（中条訳）というジェラルルの心情を説明する重要な一言であり、省くべきではないだろう。

(16) 「いまでは、ジェラルルはいつもの調子を取り戻して

(18) 「ジェラルルは自分の①握っている手が温かいこと、その心の温まるような熱のおかげで、自分は②夢の世界に遊べるのだ、ということに気がついた。夢の世界とはきわめて不正確な用語である。しかし、ポールは子供たちが落ちこんで行く半意識の状態をこのように呼んでいた。（中略）自分はいま夢の世界に遊んでいるのであろうか？③ジェラルルは、温かい手を握りしめ、おおむけになった顔をまじまじと眺めながら、心のなかでたずねてみた。（中略）自分は夢の世界に遊んでいるのであろうか？④」<sup>p22 p23</sup>

本題に入る前に、作品の大事なモチーフについて触れておこう。原文では単に「jeu・遊び」と表現されていることだが、岩波版では「夢の世界に遊ぶ」、塩谷訳、中条訳では「遊戯」という訳語が与えられている。これは、ポールと姉のエリザベートが興ずる遊びの一種で、作品の重要なモチーフの一つとなっている。この遊びについて、塩谷訳には「現実の時間からも空間からも離れ、空想の世界へと旅立つ行為」との解説がある。一種の催眠状態のようなもので、その意味では、岩波版の方が具体的に分かりやすい。

(18)の抜き書きは、これも車の中のシーンだが、ここに出てくる四つの「自分」については正確に理解する必要がある。

いた。彼はポールを見張っている。これが彼の役目だった。」<sup>p20</sup>

車の中の描写が続く。ジェラルルが付き添っているポールは、雪合戦の敵方の捕虜ではなく、怪我をした親友である。その彼を車で送る際に、なぜ「見張る」という表現を用いなければならぬのだろう。傍線部の原語（*veiller*）には、「警備（見張り）に当たる」という意味もあるが、この訳語が当てはまるような状況ではない。ここも、訳者の状況理解が問われなければならない。

(17) 「ふいに、二つの物悲しいサイレンが聞こえた。その音は耳をつんざくような、人間的な、非人間的なものとなり、窓ガラスがふるえ・・・」<sup>p22</sup>

これも家に向かう車の中の様子。近くを通過する緊急車両のサイレンの音についての描写だが、外国語の専門家が商品として世に出す訳とは思えない。原文の単語をそのまま日本語に置き換えれば傍線部のような訳にはなるが、読者としては啞然とするばかりである。「サイレンが、人の悲鳴のように聞こえることがあるかと思えば、けたたましい機械音に聞こえることもある・・・」といったことかと想像する。中条訳では、「それは悲痛な音色で、人間の声かと思えば、人間とは思えぬ音色に変わった」となっている。

傍線部①は原文を見ると、「彼が握っている手」と訳せる所で、この場合の「彼」はジェラルル自身のことなので、「自分の握っている手」で問題はない。②はこのまま読むと「ジェラルルは」と理解できてしまうが、原文は、「この熱が、彼に夢の世界に遊ぶことを可能にする」と訳すことができ、「彼」がジェラルルとは言っていない。むしろ、「夢の世界に遊ぶ」のはポールの特権であり、「この熱」がその世界に入ることを可能にしているというのだから、「彼」は熱のあるポールとするのが自然だろう。③は、ジェラルルが自問しているセリフで、原文を直訳すれば「彼は夢の世界に遊んでいるか」であり、これも「彼」はポールと考えるのが自然である。④は、③と同じ文の繰り返しで、これもポールのことを言っていると考えるのが自然である。ちなみに、この②③④の「自分」は、中条訳ではすべて「ポール」となっている。原文では、いずれも代名詞「彼」が使われているので、少し考える必要があるが、「彼」が誰のことを言っているのかは、状況さえ踏まえていれば、容易に理解できるはずである。

(19) 「ジェラルルは錯覚を起していたわけではない。ジェラルルの入って行く夢の世界は、まったく別個のものであった。」<sup>p23</sup>

(18)に続く文章で、本来なら続けて提示すべきだが、解説

の都合上、二つに分割した。この抜き書きだけでは、文章が示している状況や「夢の世界」の意味が判りにくいと思われるので、(18)を参照いただきたい。傍線部については、原文では、「彼」といった代名詞ではなく、「ポール」という、主人公の個人名で書かれている。

(20) 「ジェラルドはやはりポールが気絶したことを、その気絶の真相を、大人が気絶する場合のことを、そしてまたエリザベートが気絶するときのことを、考えずにはいられなかった。」<sup>p31-p32</sup>

ポールを家まで送ったジェラルドが、待たせておいた車で自宅まで帰る途中、車中で空想にふける場面である。抜き書き部分だけを見ていたら、特に不自然なことはないが、原文と対応させると、後半がおかしい。大人が気絶することも、エリザベートが気絶することも、現象としてはあり得るが、原文はそれにはなっていない。これに先立つ二行前に、「この聡明さは・・・」と訳されているところがある。原文では、「聡明さ」(sagesse)を三人称単数女性形の代名詞(elle)で受けて、次の文の主語としているのだが、岩波版では、その部分は巧みに省略されていて、そこは問題ない。ところが、最後に同じ代名詞(elle)がもう一度登場するのだが、この部分には、この代名詞で受けられる言葉がもう一つあって、それは、抜き書き部の主

何の気兼ねもなかった。この部屋は一つの甲羅みたいなもので、二人は同じからだの二つの手のように、そのなかで生活し、洗ったり、着物を着たりするのだった。<sup>p41</sup>

エリザベートとポールとの、近親相姦的な間柄を示すエピソードの一つで、二人が一心同体のようにして生活していると言っているところである。傍線部に続いて「着物」という言葉があるので、傍線部は衣類の洗濯のように思えてしまうが、原文は、「自分の体を洗う：se laver」という動詞を使っている。体でも衣類でも、洗うことには違くないが・・・。

(23) 「ジェラルドは毎日やって来て、悪罵の嵐に迎えられる。 (中略) 穏やかな習慣が彼をこのようなものでないから免疫にしている。」<sup>p50</sup>

前段は、病気見舞いにやって来るジェラルドに対して、親しさ故の儀式ということなのか、姉弟は手荒な言葉で出迎えるということ、ここは特に問題はない。問題は後段である。このように一行だけを取り出したから分らないのでなく、前後に文があっても分らない。手荒な歓迎も繰り返されているうちに次第に手荒とは思わなくなっていくということのようだが、なかなかそうは読み取れない。傍線部に対応する原文は、確かに「穏やかな」「習慣」と

題である「気絶」(swoon)である。つまりここは、「気絶がもたらすかもしれない結果について、考えずにはいられなかった」となるところで、岩波版では、この三人称単数女性形を、エリザベート(一人の女性であることに間違いはないのだが)としているのである。しかしながら、彼女が気絶するわけではないし、その前の、「大人が気絶する」も「大人にとって気絶がどう見えるか」と訳せるところで、大人が気絶する訳でもない。

(21) 「学校へ行くなんて、もう問題じゃないね。」<sup>p39</sup>

雪合戦後、ポールを診察した医者言葉である。ポールは、雪玉を当てられて怪我をしただけでなく胸に持病を抱えていて、かなり弱っているので医者が往診に来ている訳だから、傍線部は、「学校に入ってはいけない」ということだろうとは想像するが、直前に、医者は「大丈夫だよ、気にすることはない、たいしたことはない」と言っているので、傍線部は、「学校に行っても、問題ない」と理解できなくもない。その後で医者は、「安静、安静、安静が第一」と言っているの、読者としては、学校へ行っているのか行っていないのか、はつきりさせてほしいと思うのである。中条訳には「学校に行くのは当然無理だよ」とあり、読者は迷わない。

(22) 「エリザベートは着物をぬいだ。姉と弟のあいだでは、

訳せる二語なので、ここは訳者の力量の見せ所ということになるのだろう。

(24) 「看護婦のマリエットは、親身になって病人の世話をした。医者は(中略)毎日やって来てはあれこれ命令を下し、必要な金を渡し、命令通り実行されたかどうかを確かめてから帰って行くのであった。」<sup>p55-p56</sup>

雪合戦で怪我をしたポールには持病があり、医者が往診し、看護婦を配して看病に当たっている。「必要な金を渡し」というのは、詳細は不明だが、医者が立て替え払いをしているのか親族から前金を預かっているかのどちらかだろう。問題はその後である。抜き書き部は、医者が仕事を済ませ、自分の家に帰っていくように読めるが、傍線部の原語(Feveril)は「再びやって来る、戻って来る」という意味で、ここは、医者が自分の家に帰るのではなく、「」を確かめるために往診先へ戻ってきた」ということである。つまり、原文での医者の動きは、岩波版とは正反対ということになる。

(25) 「冷静な批判者ならば、ポールとエリザベートを複雑な人間だと考え、そこには気違いの叔母とアルコール中毒の母親の影響があると断定したに相違ない。」<sup>p56</sup>

ポールとエリザベートという、本作品の主人公について説明しているところである。「冷静な批判者」も分かりに

くい表現だが、傍線部は、主人公の出生に関する大事な部分で、原文には「père…父親」とあり、初級フランス語学習者でも間違えることはない初歩的な単語である。文学作品の翻訳の中で、最も基本的な人間関係とも言うべき父親と母親を取り違えるということがあるものなのか、まさに我が目を疑うのである。前段の「冷静な批判者」については、「公正に判断を下す人たち」（塩谷訳）とある。

(26) 「テーブルの上で叔父の眼に映るのは微笑だけであったが、その下では冷たい戦争がおこなわれていたのである。足と脇のこの戦争だけが、漸進的な変貌の唯一の動機ではなかった。子供たちの魅力もそこに働いていた。」<sup>p65</sup>

ポールの転地療養に行った先での姉弟の悪ふざけの一つについての描写である。エリザベートは、ホテルの食堂の席に着くと、テーブルの上では平静を装いながら、テーブルの下ではポールを足蹴にするといういたづらを始める。前半はそのことを言っている。テーブルの下の「戦争」のことを言っているのは、後半の「脇」というのは解せないが、ここは原文通りである。判らないのは傍線部分である。何かが変わっていくことに対して、この「戦争」だけではなく、「戦争」の目撃者たる「子供たち」（27参照）も関係していたと言いたいのだろうと思うが、この訳で何を理解

暗がりなかに浸っていた。ポールは素裸で歩き回り、  
ベッドを直したり、シーツのしわを伸ばしたり・

・」<sup>p75</sup>

主人公宅での、登場人物たちによる奇妙な生活の一面を描いたところである。この部分の要点を示せば、ポールは服を脱いだ、ジェラルが部屋着を探してやった、しかし、その後のポールは素裸である、ということになる。ありえないことではないが、「ジェラルが部屋着を探してやった」というのだから、ポールはそれを身にまとっているというのが自然な展開だろう。ポールが素裸ということは、ジェラルが探していたのはポールの服ではないということになる。ジェラルが探した服は、「彼の（彼女のでもよい）服」となっているの、どちらのものともとれるが、塩谷訳では、「ジェラルは自分の部屋着を」としている。しかも、ジェラルの動作を表す動詞は「再び見出す・捜し出す」であり、それがポールのための行為とは言っていない。

(30) 「我は愛す、（中略）そのけばけばしきスカートを、  
その大きな、いびつのシヨールを、\*\*\*」  
そしてまたその狭き額を」<sup>p79</sup>

登場人物たちが繰り広げる夜の遊び（28）の「劇場」の中で、ポールが朗読した詩である。対訳本によれば、原典

させようというのだろう。この部分の中条訳は、「徐々に進行する変化を速めたのは」で、なるほどと思う。

(27) 「そういう少女たちは、離れたところにいるので、足蹴の戦争と取りすました顔を、まるで構成されたように眺めることができるのだった。」<sup>p65</sup>

(26) の続きで、「テーブルの下での戦争」は、少し離れたところの席に子どもたちからはよく見えるということのようにだが、傍線部は、読者に、どのような情景を想像させようとしているのだろう。そもそも、「構成されたように」と「眺める」は修飾・被修飾の関係として不自然である。「一段高い舞台で演じられるように」（中条訳）と言われると、情景が目には浮かぶ。

(28) 「部屋の劇場は夜の十時に開場した。」<sup>p73</sup>

「劇場」というのは、主人公姉弟やその友人たちが過ごす独特な時間のことである。ただし原文によれば、それは「十一時」に始まることになっている。

(29) 「ポールが着物を脱ぎにかかると、ジェラルが部屋着を探してやる。ポールを然るべき場所につかせ、つかい棒をする。と部屋の精霊がトントントンと開幕の合図をするのだった。（中略…この間、芝居のルーのようなことが述べられていて、人物の動きについての記述はない）赤い安綿布が、舞台装置を真紅の薄

は、ボードレールの詩で、\*部には、sa parole egarée（「錯綜したるその言葉を」《塩谷訳》、「常軌を逸した言葉」《中条訳》）が入ることになっている。どちらの訳が適切かは、筆者には分からないが、この省略部は、「けばけばしき」に該当する bigarée と韻を踏んでいて、日本語にしようとするところからなくなってしまうが、韻は、詩人が命をかけているところであり、このような省略をボードレールが知ったら、卒倒するのではないか。

(31) 「富は一つの才能であり、貧しさも同様に一つの才能である。金持ちになった貧乏人は、贅沢な貧しさをひ  
けらかすであろう。」<sup>p87</sup>

主人公たちは、経済的には何不自由のない生活をしているという設定で、そうした彼らの生活ぶりについての描写である。「金持ちになった貧乏人」というのは、いわゆる成り上がり者のことを言っているわけだが、その後の訳はただけない。原文の, une pauvreté luxueuse は、学校で習う文法に従って訳せば、確かに「贅沢な貧しさ」となる。しかし、ここは根っからの金持ちの示す贅沢な振る舞いは贅沢そのものだが、成り上がり者の場合にはそういう訳にはいかない。一見贅沢に振舞っているつもりでも、お里が知れてしまうということではないか。中条訳では「貧しい贅沢」となっていて、これなら納得がいく。そもそも、

「ひけらかす」という言葉は、見せびらかす、自慢するという意味があるはずで、「贅沢な」という形容詞がつこうとも、「貧しさをひけらかす」という表現は、日本語としては馴染まないように思われる。

(32) 「その晩から、ポールとアガートのあいだには、交錯する糸の①布地が織りなされた。時の復讐が特権を逆転させた②。」<sup>p95</sup>

傍線部①の「の」に相当する原語 (de) には、限定を意味する「誰々の・何々の」という使い方もあるが、起源や手段を意味する「何々から・何々で」という意味もある。「糸の布地」でも分からなくはないが、「糸で布地が織られ」とするのが自然だろう。それよりも、傍線部②はどう理解すべきだろう。「時の復讐」とは、まるでSF小説のタイトルのようだが、「復讐」は une revanche の訳らしい。最近よく耳にするリベンジと通じるところもあるようだが、他訳では、「時間が巻き戻り」(塩谷訳)、「時間が巻き戻され」(中条訳)とされており、これなら普通の日本語として理解出来る。また、「特権の逆転」も分からない訳で、該当する原語について、手元の辞書には、「特権」の意味しか出ていないが、塩谷訳では「立場が逆転した」、中条訳では「支配関係がひっくり返った」とあり、これならよく判る。

(33) 「・・・彼女(エリザベート)はポールが壁の上にピンでとめてあるアパッシェや、探偵や、アメリカのスターたちのすべてが、孤児のアガートや、ダルジュロスIIアタリーに似ていることに気がついた。」<sup>p95</sup>

ポールの部屋の壁にとめてあるプロマイドのことを言っているのが、「アパッシェ(アパッチ)」は、西部劇からのプロマイドかと想像したが、この語には、「ごろつき、ちんぴら」の意味もあり、こちらの方が自然な気がする。また、傍線部は、このままだと、「アタリー」は、ダルジュロスの姓のように読めてしまうが、そうではない。この作品のはじめの部分で、ある芝居の上演に際し、ダルジュロスがアタリーという役を演じたというエピソードが紹介されており、「アタリーに扮したダルジュロス」(塩谷訳、中条訳)という意味のようだ。

(34) 「部屋のさまざまな顔が作りだす家庭的な雰囲気は一つの事実だった。」<sup>p96</sup>

「部屋のさまざまな顔」というのは、(33)で述べた、ポールの部屋の壁に貼られているプロマイドのことで、それが「家庭的な雰囲気」と言われれば、ホームドラマの一シーンを想像してしまうが、プロマイドの中には、ごろつきや探偵が含まれているので、家庭的というのは不自然である。該当の原語 (family) には、「家族、家庭、親族、一族」

等の意味があり、状況によって選ぶべき訳語は異なってくる。ここは、顔の感じが似ていたということを言っているようで、他訳では、「この部屋にある顔が家族のように似た雰囲気であるのは、事実だった」(塩谷訳)、「この部屋に集められた顔がみんな家族のように似ていることは事実だった」(中条訳)となっている。ポールは意識していなかったようだが、集めた写真には、容貌の類似という共通性があったということ、他愛もないことのように思われるかもしれないが、この小説において、容貌の類似ということは極めて重要なモチーフであり、いい加減に訳されるは困るのである。

(35) 「マリエットは、冷たい夕食を残して行った。」<sup>p97</sup>

主人公たちの世話を焼く家政婦(マリエット)が作り置きした夕食についての描写である。自分だけ温かい夕食を食べて帰ってしまい、残ったものが冷えていたということだと、何ともひどい家政婦だということになる。原語 (diner froid) は、確かに「冷たい夕食」と訳せるが、中条訳には「温めなおす必要のない夕食を作っておいてくれる」とあり、マリエットは何と気の利いた家政婦かと思う。

(36) 「アガートは会話を混乱させる方法を発見するし、ジエラルはそこで一息つける。」<sup>p98</sup>

主人公たち四人の共同生活に陰りが見え始めた頃の描写

である。この抜き書き部だけでは、状況が判りにくい、四人の相互関係や各自の心情が語られているところで、傍線部はエリザベートでないと、四人揃わなくなってしまうのである。特に人数合わせをする必要はないが、傍線部は、原文では「エリザベート」と個人名で書かれているので、敢えてそれを覚えてまで三人にする必要はない。

(37) 「アガートはポールの傲慢さとポール自身に眩惑された。\*\*\*。というのも、傲慢さは人を魅力的にするものであり・・・」<sup>p98</sup>

(36)につながる文章である。傍線部を含む文の主語はアガートなので、何とも妙な訳である。原文には、「アガートは、ポールの尊大さに眩惑され」と訳せる一文があり、その後、「そして、ポールは彼自身」と訳せる教語が続いている(\*部分)。ここは前文を受けているところなので、「ポールは自分自身に幻惑され」と「幻惑され」を補って読むべきであると、塩谷訳には説明がある。つまり、岩波版では、本来二つであるべき文を無理やり一つに圧縮してしまったということらしい。しかし、それに続くところで、岩波版でも、ポールが自分自身に幻惑されるようになった理由が説明されているので、訳者はどのような状況理解をしていたのか理解に苦しむのである。

(38) 「それでも、彼らがある種の精神錯乱に陥ることもな

いではなかった。すると、熱がいびつな鏡で部屋をとりかこんでしまう。そんなときアガートは憂鬱になり、心のなかでたずねるのであった。」<sup>p100</sup>

物語の半ば、四人の（特に、ポールとエリザベートの）生活に対して、一緒に生活をするようになっていたアガートが抱く懸念について述べられたところである。「警官隊がパトカーで賊を取り囲む」というなら分かるが、この傍線部はどういう状況を言っているのだろう。逐語訳ならそうした訳も可能かもしれないが、ここでの熱 (heat) は、太陽の熱や電気の熱ではなく、病気による熱なのである。他訳では、「熱に浮かされると、部屋が歪んだ鏡で覆われるのだ」（塩谷訳）、あるいは「熱に浮かされ、部屋が歪んだ鏡張りに変わるのだ」（中条訳）とあり、難しいながらも何とか分かる。

(39) 「自分から抜け出す技術に習熟していた彼らは、自己のなかに戻って行く新しい状態を、放心と呼んでいた。（中略）自己のなかに沈潜するには、彼らにとって不可能な訓練を必要とする。」<sup>p101</sup>

「自分から抜け出す」というのは、(18)で述べた「夢の世界に遊ぶ」ことを言っている。それが次第に難しくなってきたのである。その原因については原作を読んでいただくことにして、傍線部の通りなら、必要とされても不可能な

ものではないだろうと言いたくなる。「不可能な」に対応する原語 (incapable) には、調べてみると「できない」の意味もあるが、「資格がない」という意味もあり、中条訳では「不得意な技だった」とある。

(40) 「いずれにせよ、この写真は、無実なものではなかった。」<sup>p102</sup>

エリザベートが連れてきたアガートという少女の容貌が、ダルジュロスとよく似ていたということが、この悲劇の重要なモチーフである。だから、ダルジュロスの写真の扱いに関しては、注意をしなければならないことになるのだが、写真が「無実」とはどういうことだろう。これに該当する原語 (inoffensive) について、手元の辞書には「無害な・副作用がない」とあり、それを否定しているのだから、無害でない、副作用がないわけではないということとは、有害だ、副作用がある、つまり危険だ、ということになる。ダルジュロスの存在は、主人公たちに重要な影響を与えるということを言っているわけで、塩谷訳も中条訳も、「危険な」という訳語を選んでいる。

(41) 「彼（ポール）はエリザベートが『楽屋口』と呼んでいる場所で三人組を待ち伏せした。そしてスポーツマンらしい青年がジュエラーと一緒に、洋服店の前で待ち合わせ、みんなを車でどこかへ連れ去るのを発見し

た。」<sup>p104</sup>

エリザベートの勤務先の出入り口で、ポールが彼女とその友人たちが出てくるところを待ち伏せしていると、他にも待っていた人たちがいて、エリザベートたちが出てくるや、車でどこかへ連れ去って行くのを見た、ということのようだが、「発見した」という表現は、普通こういう状況では使わないだろう。塩谷訳も中条訳も「目撃した」としている。

(42) 「彼女（エリザベート）は全身が温まるような、心地よさを感じた。彼女の心は、部屋のすみずみまでパツと明るくなった。あのポールの笑いかたがエリザベートは大好きだった!」<sup>p106</sup>

物語の中ほど、ミカエルとの結婚話を打ち明けたエリザベートとポールとの間で、ちよつとした感情的なやりとりがあった後のことである。一読して、我が目を疑いたくなるような訳である。原文を直訳すれば、「彼女の心は、部屋の隅々まで広がった」である。傍線部の述語部分が「明るくした」なら、日本語としては不自然ではないのだが、このような捻れた日本語を、岩波の編集担当者は気持ち悪く思わなかったのだろうか。述語部分の原語 (s' épanouir) には、「広がる、開花する、成熟する」等の意味がある。しかも、原文には、わざわざ「部屋の隅々まで」という補

語がついているにも拘わらず、なぜこのような捻れた訳をするのか分からない。

(43) 「アガートは例の部屋と別れる悲運に直面した。彼女はこの部屋の魔力と、ポールとの親密な交際から離れていくのを悲しんで、人知れず泣いた。\*\*\*。姉弟のあいだの接触が中断されて、そこから奇跡が飛び出した。」<sup>p110</sup>

エリザベートの結婚が決まり、エリザベートとアガートは、それまでポール、ジュエラーを含め、四人で過ごしてきたアパートを去り、広大な新居に移ることになった。原文では、\*部に「夜はどうなってしまうのだろう」（塩谷訳）と訳せる一文がある。この一文がなくても、物語の進行に直接影響はないかもしれないが、アパートで過ごしてきた時間は、登場人物たちにとっては重要なひと時で、この一文を削除する理由が見つからない。

(44) 「モンマルトル街では、姉弟が髪のかみ合いをしていたころ、孤独で暮らすというポールが胸に温めていた計画も、アガートが出て行ってしまったために、実現不可能になった」<sup>p113</sup>

エリザベートとの結婚式を済ませた新郎（ミカエル）は、用事で出かけた南仏で、不慮の事故に遭い亡くなってしまふ。後には、莫大な財産が残されたという設定である。

「姉弟が髪のかみ合いをしていたころ」というのは、結婚前のことを言っている。エリザベートとアガートがモンマルトルのアパートから出て行き、今やそこにはポールしか住んでいない。つまり、「孤独で暮らす」というポールの願いは実現された訳だが、「(同居人が)出て行ってしまったために、(一人暮らしが)実現不可能になった」とは何ともシュールな話である。傍線部に対応すると思われる原語 (insupportable) には、「耐えられない」の意味がある。つまり、一人つきりになりたいと思っていたが、実際にみんながいなくなってしまうと、それは耐えられないものではなかったというところで、岩波版とは全く逆の意味になる。中条訳では、「それは耐えがたいものになった」とある。しかも岩波版では、「実現不可能」とした三行後で「ポールはせっかく手に入れた孤独が何の利益をもたらさないばかりか、反対に、恐るべき空虚さによって彼の胸をむしばむのに気がついた」とあり、これは先の抜き書きと明らかに矛盾している。

岩波版には、しばしばこうした矛盾する箇所が出現する。訳者は物語の進行をどう理解していたのか、読者にどう理解させようとしていたのかという疑問が改めて湧いてくるのである。

(45) 「自分は若い娘と学生①のあいだに生れた偶然の一致

なかった。」<sup>p131</sup>  
<sup>p132</sup>

物語の終わりに近い所、エリザベートは弟のポールとの今までの生活を変えたくないのに、ポールとアガートが互いに惹かれあっていることに嫉妬を感じ、二人の仲を裂こうと画策する。そのエリザベートが、ポールの部屋に向かう場面の描写である。傍線部の原語 (原形: haïter) は、普通は「住んでいる」という意味で用いられるが、比喻として「取りつく」という意味もあり、原文ではその過去分詞が用いられているので「取りつけられている」という意味になる。「慣れている」は habituer なので、この語と取り違えたということなのだろうか。ここは、エリザベートがかすかな音に反応するようになっていっていることを言っているの、「彼女は機械のように降りて行った。微かな音だけが聞こえる装置が取り付けられているようだ」(塩谷訳)ならばよく判る。奇妙なのは、岩波版には、抜き書き部に続くところに、「こうしたメカニズムが彼女を操り・

・・・」とあるので、読者は益々混乱してしまうのである。  
(47) 「・・・婚約と結婚が大いそぎで行われた。めいめいがそれぞれの役を演じ、互いに気前の良さを競いながら、わざとらしい上機嫌をよそおっていた。内輪だけで式を挙げ、ポールや、ジェラールや、アガートは、ひどく陽気に振舞って、エリザベートだけはやり切れ

②の犠牲だと思いきんでいたポールは、いかに運命が彼の武器を訪れるか③を、そしてまたその武器が照準し、心を発見する④のがいかに遅いかを知った」<sup>p124</sup>

<sup>p125</sup> エリザベートが職場から連れてきた若い娘 (アガート) が、自分が憧れていた「学生 (ダルジュロス)」に似ていることに気づいたポールの心境を述べているところである。傍線部①はアガートとダルジュロスのこと、傍線部②は二人が似ているということを言っているらしいが、なかなかそうは読み取れない。傍線部③の「彼」は、このまま読めばポールということになるが、それでは何を言っているのか判らない。述語の「訪れる」に対応する原語 (visiter) には「訪れる」以外に、「調べる」「検査する」という意味があることを知れば、ここは、「運命が自分自身の武器を点検し」と意味のある日本語として理解出来る。傍線部④については、武器が照準を合わせていると言っているのだから「心」ではなく「心臓」と訳した方が良さそうで、塩谷訳では、「運命がどれほど念入りに武器を点検し、狙いをつけ、心臓に照準を合わせるまでに時間をかけるのかを知ったのである。」としている。

(46) 「彼女は機械的に降りて行った。彼女は一種のメカニズムに馴れており、そのかすかな物音にしか耳を傾け

ない思いをするほどであったが、そこには死のような沈黙のしかかっていた。」<sup>p145</sup>  
<sup>p146</sup>

エリザベートの画策通り、ポールとの仲を裂かれたアガートは、ジェラールと結婚することになった。その結婚式に関する記述であるが、傍線部はこのことと理解したらいいのだろうか。このまま読めば、「そこ」は「結婚式場では」と読めてしまうが、それではおかしい。心から喜べない結婚式であることは、「気前の良さを競い」「わざとらしい上機嫌」の表現から理解出来るが、この結婚の立役者であるエリザベートも、うわべでは皆に合わせて陽気に振舞っているはずである。だから、「そこ」が「エリザベートの心の中では」というなら納得するが、原文をみると、「式の外では」という言葉が与えられていて、塩谷訳は「それ以外では」、中条訳は「それ以外の時間には」としていて、「結婚式場」とは正反対の意味になる。

(48) 「ポールはダルジュロスが以前と変わっていないなかったかどうか、とたずねた。『変わっていないね、少し顔色が蒼くなつたようだが・・・』」<sup>①</sup> まるでアガートのお兄さんともいっていいところだね②。前のような横柄な口はきかなくなつたよ。ひどく愛想がいいんだ。インド・シナとフランスとのあいだを行ったり来たりしているそうだ。ある自動車の代理販売をやっているの

』」<sup>p150</sup>

物語の終わりに近い部分の一コマで、ボールの所にやって来たジェラルドが、ダルジュロスに会ったことを告げる場所である。この作品が「訳しにくい」と言われる典型のような所である。特に分かりにくい言葉はないが、この部分、原文を見ると、どこまでがジェラルドの言葉として『』に入るのか、判然としない。他の所では、発話が終了すると改行されているので、それに倣えば、ジェラルドの言葉はもっと長く続くことになるが、それでは明らかにおかしい。岩波版では、抜き書きした『』内全部がジェラルドの言葉だが、中条訳では傍線部①まで、塩谷訳では傍線部②までがジェラルドの言葉として『』に入れられていて、三者三様の訳となっている。要するに、ここは解釈の問題なのかもしれない。個人的には、中条訳が自然なように思う。

(49) 「みんなは口をつぐんだ。この球が沈黙を命じたのである。それは一匹の爬虫類からできており、頭が幾つも見え隠れする蛇のとぐるのように人を魅惑し、嫌悪の情を催させた。」<sup>p153</sup>

物語の結末近く、久し振りにダルジュロスと再会したジェラルドが、彼から預かってきた秘密めいたものを取り出す場面。不気味だけれど好奇心をそえられるということ

言いたいらしいが、原文とはかなりかけ離れている。原文は、「一匹の爬虫類のようだが、たくさんの蛇が絡み合っているようで、そこにはいくつもの頭が見えて」と訳せるような文になっていて、岩波版のように「一匹の爬虫類からできており」とは断定していない。また、「頭が幾つも見え隠れする蛇のとぐるのように人を魅了し」というのもあまり見かけない日本語である。「とぐるを巻いた蛇」というなら理解出来るが。

(50) 「『こいつは薬①だ。薬になるんだ②。毒になんかになるものか③』ボールはそう云って、手を伸ばそうとした。」<sup>p153</sup>

(49)に続く文章である。ジェラルドが、ダルジュロスから預かってきた包みを開いたときのことである。短い文章だが、翻訳はすべて、訳者の「創作」のようになっている。傍線部①は、原語では *drogue* で、辞書を引けば真っ先に「麻薬」と出ている。また、直訳すれば、傍線部②は「彼はドラッグをやっている」、傍線部③は「彼が、毒をくれることはないだろう」となる。中条訳では「『これは麻薬だ』とボールはいった。『ダルジュロスは麻薬をやっているんだ。毒なんかよこすわけがない』」となっている。

(51) 「ボールは彼女(エリザベート)のあとを追った。ボールはやってきた。これは明らかな事実だった①。こ

の確信が、彼女の不可解な頭脳の働き②の根底をなしていた。彼女はそれを行使することによって、ボールを魅惑しつづけ、つづけ、なおもつづけた。もはや彼女は確信していた。アガートが、自分の首にしがみついていることを、ボールはもう感じてはいないのだ、アガートの嘆きをもう聞いてはいないのだ。姉と弟はいかにして、それを聞くことができるようになったのか③?」<sup>p169</sup>

エリザベートの策略が露見し、物語が破局に向かっていくところで、登場人物たちの心理の混乱を反映したように訳文も混乱ぎみである。傍線①の部分は、エリザベートとボールとの関係性について述べている所で、物理的に後を追っているところではなく、心理的に付き従ってきているということを言っている。中条訳では「ボールが自分に従い、一緒に来ていることが何よりの証拠だった」となっている。傍線②の「不可解」には、どのような意味を込めたのだろう。「頭脳の働き」を修飾している言葉 (*inconceivable*) について、辞書には「考えられない、想像もつかない、信じがたい、途方もない等」の訳が出ている。「不可解」と言われると、ネガティブなことを想像するが、ここでは聡明な、回転の速いといった意味でないと文章として成立しないところで、塩谷は「驚くべき」、中条は「途

方もない」の訳を採用している。傍線③のすぐ前の文で「ボールは(中略)もう聞いてはいないのだ」と言っておきながら、「聞くことができるようになった」と言われると、読者としては混乱するばかりである。塩谷訳は「どうして、この姉弟にアガートの声が聞けたはずがあったらどうか?」と、反語的に訳している。つまり、ここは、聞こえていないのである。

(52) 「エリザベートの叫びは、姉弟が死の世界を構成する音調よりも低く響き渡る」<sup>p169</sup>

(51)に続く文章である。傍線部、原文は「彼女の叫び」と、所有形容詞で表記されており、彼女(彼でもないのだが)が誰なのか、すぐには分からない。ここでは、前後の文章との関係から、アガートにしないと不自然である。